

# 四神図の系譜

和田 萃

## Origins and Development of the Four Directional Deities

はじめに

- ①キトラ古墳と高松塚古墳の四神図
  - ②キトラ古墳の天文図
  - ③装飾古墳と四神図
  - ④薬師寺金堂本尊の台座にみえる四神図
  - ⑤朝賀・即位式と四神図
  - ⑥四神図の源流
- 結語

### 【論文要旨】

四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）は、古代中国では天の四霊とされ、東・南・西・北方の星宿を象徴するものであり、また地上の四方位を示す神獣とされた。キトラ古墳や高松塚古墳では、天文図（星宿図）、日月像などとともに、四神図が描かれている。薬師寺金堂の本尊台座にも、有名な四神図がある。三つの四神図を比較すると、薬師寺の本尊台座の四神には新しい要素が認められ、平城京で薬師寺伽藍が新しく造営されてからのものと判断される。それはまた、本尊が神龜年間頃に新鑄されたことを示している。

大宝元年の朝賀に際して、銅鳥幢、日像・月像の幡、四神幡が建てられ、「文物の儀、ここに備はれり」とされた。「内裏式」「貞観儀式」「延喜式」にみえる朝賀式を検討すると、それは即位式と同構造であり、幢・幡や四神旗が大極殿の前庭に立てられている。正暦年間（九九〇～九五）以後、朝賀式は行なわれなくなったが、即位式では現在に至るまで、これらの幢・幡・四神旗が立てられている。四神旗の図柄につ

いて、先の四神図や「文安御即位調度図」さらに近世の絵図と比べると、時代的な変化がうかがえる。

古代中国での四神図の事例をみると、紀元前五世紀の曾侯乙墓の衣装箱にみえる青龍と白虎が最も古く、漢代になると、方格規矩四神鏡や墓室装飾にもみられるようになる。以後、東アジア世界では、四神図を墓室装飾に用いた事例が多い。日本古代の四神図は、天文図とともに高句麗から伝えられたもので、キトラ古墳・高松塚古墳の壁画製作者の一人に、高句麗からの渡来氏族出身の黄文連本實を想定できる。

唐代の元會儀礼を受容して、日本古代の朝賀式は成立したが、八角形の高御座を敷設したり、四神旗を立てるなど、新たな変容も加えられた。それらは、天皇が日本の全国土を統治するシンボルとされたのである。大宝元年の朝賀式について、「文物の儀、ここに備はれり」とされた背景には、永年にわたる歴史的経緯があった。